

ヨハネによる福音書 20 章 30 節－31 節
「命を受けるため」

《1》

先週、献堂式を主の祝福のうちに執り行うことができました。まさに正式にこの教会堂を神さまにささげ、これは神さまのもの・所有物であると表明したわけです。

そして、今朝がその後の、記念すべき最初の礼拝となります。

さきほど御言葉は、短い個所を読みました。そして、お気づきになったかもしれませんが、これは〔あとがき〕のような印象を受けます。

実際、多くの学者が、これはヨハネ福音書のあとがきである。ここで本来の福音書は一旦終わっている。21 章はヨハネが後から書き加えたものである、というように考えているようです。

私たちがほかの本を読むときでも、最初に前書きを読むのは勿論として、あとがきも最初に読んでしまう、ということがありますね。本屋さんで、本を手にとって、買って読もうかどうしようかと迷っているときに、あとがきを読めば、作者がどんな思いでこれを書いているのかといったことが、何となくわかることがあります。判断の一助になります。

それと同じで、今朝のこの短い個所では、この福音書が記していることは何なのか。また、この福音書はどのような目的で書かれたのか。そういったことをヨハネが簡潔に記しています。

ですから、これをあとがきと言っても、よいのでしょう。ただし、そう断定する必要もないかもしれません。ヨハネ福音書の最後、21 章 25 節の御言葉も、いわばあとがきのような文章です。

今朝の個所をあとがきと考えると、どうしても 21 章は付け足しという理解になってしまうでしょうから、何もこれをあとがきと考える必要はないかもしれません。

いずれにしても、これは細かい問題です。信仰が左右されるような問題ではないので、このようなことは自由に考えればよいのだと思います。

さて、そのように、たとえあとがきとは考えなくても、この個所で、この福音書が何を書いているのか、その目的は何か、ということ、ヨハネが改めて書いていることは確かです。ヨハネは、ぜひ、私がこれを書いた思いを汲み取ってほしい、というわけですね。

こういう言葉で始まっています。「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない」。

しるし。それは奇跡です。不思議な御業です。そのしるしを行なう方が神であるか、神から遣わされた者であるかを示すものです。

主は多くのしるしを行なわれたが、このヨハネ福音書に記されているしるしは、それほど多くはない、というのですね。それは事実そのとおりでしょう。

ヨハネ福音書に出てくるしるしを挙げると、――カナの婚礼で、水をぶどう酒に変

えられたこと (2章)、
ある役人の息子の病気を癒されたこと (4章)、
三十八年間病気で苦しみ、ベトザタの池で横たわっていた人の病を癒されたこと (5章)、
五千人の人々を五つのパンと二匹の魚で養われたこと (6章)、
生まれつき目の見えない人の目を開かれたこと (9章)、
そして、ラザロを生き返らせる奇跡がありました (11章)。
これで奇跡は六つです。ほかの福音書と較べるまでもなく、ヨハネにおける奇跡の数は少ないでしょう。

それで、ヨハネはイエスさまのしるしを全部、知っていたでしょうが、ここに記したのはその一部である。これ以外のしるしについては、ほかの福音書を読んでほしい、ということだと思います。

なおヨハネの、この〔ここに書かれているのは一部である、抜粋である〕という言い方ですが、これは当時広く行われていた、一種伝統的な表現であるとも言われます。

ユダヤの文学やギリシアの文学などに、それが見られるそうです。ヨハネはそれに則って述べている、と言えるかもしれない。

確かに、そういう一面もあるのかもしれませんが、しかし、別の理由もあるのではないのでしょうか。ヨハネがそれほど多くのしるしを書くことがなかった、根本的な理由です。

しるしということであれば、最大のしるしは何でしょうか？ それは、(さきほど列挙するときには挙げませんでした)「復活」であると言ってよいでしょう。復活こそ、最高・最大で、ほかと較べようのない絶大なる奇跡です。

この復活こそ、伝えたい。復活を告げ知らせることができれば、この福音書を記す目的を達成することができる。最初からヨハネには、この思いがあったのではないのでしょうか。

なお、主は「弟子たちの前で」多くのしるしをなさった。「弟子たちの前」という事実を見逃さないように、ということです。

弟子たちは、そのようにして、主のしるしの、また何よりも主の復活の、確かな証人となった、ということ。彼らがどのようにして、実際に証人として堅く立つことができるようになったのか。それは、使徒言行録の冒頭で、天に昇られる直前のイエスさまが弟子たちに告げられている御言葉にあるとおりです。

1章8節「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで、私の証人となる」。

弟子たちは、復活の主を見て、それを証しました。後の時代は、今に到るまで、誰もイエスさまにお会いしていません。それでも、弟子たちの証しを受け入れ、聖霊に導かれて、ヨハネやペトロたちと同じように、証人となっています。

それは弟子たちの証しが確かだからです。同じ証しを、私たちは証人として、行な

うのです。

《2》

次いでヨハネは、この書物を記した目的を語ります。

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」。

目的は、二つですね。信じることと、命を受けること。

まず、信じることですが、それはイエスが神の子であることと、メシア・救い主・キリストであることとを、信じること。

ユダヤ人たちにとって、神の子であることとメシアであることとは、ほとんど同義語であったと言われます。ですから、この二つの意味内容が、どう違うのか、といったことで、細かな区別立てをする必要はないでしょう。

神の子である救い主。イエスさまをそのような御方として、信じるのです。

そして、この言葉は、言葉遣いそのものは同じではありませんが、トマスの信仰告白である「私の主よ、私の神よ」と同じ響きをもっています。——わが主、わが神。あなたこそ神の子、キリストです。

《3》

そして、信じることによって、あなたがたが命を受けること。これが、この福音書を書いた第二の目的である。

この命は、永遠の命ですね。——命を、また永遠の命を、ヨハネ福音書は随所で語っています。

一度、「命、永遠の命」ということに着目しながら、この福音書を通読してみるのも意義あることかと思えます。

何と言っても、すぐに思い浮かぶのは 3 章 16 節かと思えます。福音が凝縮されていると言ってよい御言葉です。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。

御子を信じる者は、決して滅びることがなく、永遠の命を得る。これは確かである。

また、5 章 24 節にはこうあります。「はっきり言っておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また裁かれることなく、死から命へと移っている」。

ここでは主イエス・キリストを遣わした御方、父なる神さまを信じるとあります。その人は永遠の命を得る。

御子と言われ、父なる神と言われていますが、私たちが信じるというとき、父も御子も同じように信じるのですから——そうでなければ、正しい信仰となりません——、どちらの言い方でも同じことが言われていることになります。

それをはっきり言葉でも言い表わしているのが、17 章 3 節となります。イエスさまのお祈りの中での言葉です。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」。

「知る」というのは、何度も言っていますが、頭で知るだけのことではなく、いわ

ば心で知ること。親しくする、愛する、ということに近いですね。主イエス・キリストに堅くつながり、そして父なる神さまの御手の内に生かされていることを、絶えず感謝し、喜んで生きることです。

父なる神さまと主なるイエス・キリストを知り、愛し、信じるならば、必ず永遠の命が与えられる。これが、主が私たちに約束されていることです。

そもそも、ヨハネ福音書の始まりから、「命」がこの福音書の大切な主題であることが、はっきりと告げられていました。

1章1節「初めに言があった」。「言」と一文字で記されているのは、この言というのが、端的に主イエス・キリスト御自身を指しているからです。

4節「言の内に命があった」。主イエス・キリストのうちに、豊かで真実の命が満ち溢れています。信仰により、この溢れるばかりの豊かな命を、私たちは受けるのです。

なお、今日の31節に、「あなたがたが、イエスは神の子であると信じるため」とありますが、この「信じるため」という個所のギリシア語原文をどう見るかという点で二つの立場があります。

聖書は皆、写本によって今に伝えられています。この場合、有力な写本の間で、違いがあるので、どちらを採るかという見解の相違が生じます。その違いは、「信じるために」と訳されている言葉のギリシア語において、σ〔シグマ〕の小さな一文字が入るか入らないかという違いです。それで意味が違ってきます。――

信じるようになるため、か、信じ続けるため、か。その違いです。

前者の場合、まだ信じていない人が信じるようになる、という意味合いがあるでしょう。後者の場合は、既に信じている人がその信仰を失うことなく、信じ続けるようにということです。

これは、もう学問的な研究で解決できるようなことではない、と思います。ですから、これ以上細かなことは述べませんが、信仰的理解・教会的理解としては、これはどちらの場合も含まれていると考えてよい、と思います。

写本の研究などは、そのことに改めて気づかせてくれた（両方の解釈がありうる、ということ）、という意味で有益なものといえるでしょう。

ヨハネ福音書を通して、新たに信仰を持つこともあるでしょうし、また、信仰の養いをより確かなこととすることもあるでしょう。そのどちらをも、ヨハネが、また主ご自身が、願っておられることに違いない。

信じるならば、永遠の命を得ることができる。この確かな約束があります。

信仰をもって、これからも絶えず主と共にあり、喜んで、ひたすら前に向かって、歩み続けていきましょう。

2021年7月18日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

あなたは、私たちが永遠の命をもって、あなたとの豊かな交わりのうちに生きるこ

とを、何よりも願ってくださっています。

そのために主イエス・キリストを私たちのもとへとお送りくださり、十字架の贖いと命へのご復活により、私たちに与えられる命が、いかに確かなものであるかを示してくださいました。

そして、信仰をもって、この確かな永遠の命に生きるようにと、招き続けてくださっています。

どうか、既に信仰に生かされている私たちが、いよいよ与えられているその信仰を感謝し、喜んで、希望をもって歩み続けていく者でありますように。

また、まだあなたを知らない多くの方々が、あなたを知り、信じて、人生の歩みが根本的などころから、命と喜びに彩られたものへと変えられますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司